

真相

神永学

Prologue

ずずつ。

ずず。

ずず。

何かを引き摺ひるような音が近付いて来る。

廊下を進み、ぼくのいる部屋に向かっているのは間違いない。

ぼくは、ゴルフの7番アイアンを手に取り、グリップの部分を強く握る。

掌てのひらに汗が滲にじむ。

ずず。

ずず。

定期的に聞こえてきた音が、ピタリと止まった。

部屋のドアの向こうに、何かがいる気配を感じた。それが、何なのかは分からないが、人ならざる何か——であることは間違いない。

やがて、ゆつくりとドアが開いた。

ぬうっと部屋の中に、長い髪を垂らした女の顔が入って来る。

頭皮の一部が捲れあがっていて、そこから血が滴っている。鼻
がもげていて、かつて鼻があつた場所は肉が剥き出しになっている。
眼窩にあるはずの眼球もなく、穿たれた二つの穴の向こうに、小
さく赤い光が灯っていた。

よくみると、顔はかつて人であつたことが窺えるが、身体は人
間のそれとは、明らかに異なっていた。

ぼくは、恐怖を押し殺し、異形のもの頭部めがけてアイアンを
振り下ろした。

だが、ぼくのその攻撃はあっさり止められてしまった。

異形のもの身体から、幾本もの手が伸びてきて、ぼくの首と両
手を掴んだ。

逃れようと暴れたがダメだった。

冷たく、固いその手は、強くぼくの手と首を掴んだまま離さない。

——死ぬかもしれない。

この事態を招いたのは、ぼく自身だが、まさかここまでとは思わ
なかった。諦めが広がるのと同時に、ぼくの意識は闇の中に墜ちて
行った——。

1

△最近、仕事でミスを繰り返してしまっています。何かのバグかと思うのですが、どなたか対処法が分かる方はいらっしゃいますか？

▽

武英^{たけふさ}がインターネットの掲示板でその書き込みを見つけたのは、
偶々^{たまたま}だった。

書き込まれたのは、プログラマーたちが情報交換をしている掲示板だったし、文章の内容からしても、何かしらのプログラミングに発生したバグに関するものだと思っていた。

他のユーザーたちも、武英と同じ考えを持ち、バグの発生条件を訊^{たず}ねるコメントがずらりと並んだ。

それに対する、投稿者△アリス▽の回答は、実に奇妙なものだった。
アリス^{いり}曰く、ミスが起きるのは、クライアントの私生活について、
思考している最中だという。

△それって、プログラムではなく、恋の話ですよね▽

そう書き込まれたコメントをきっかけに、掲示板はすっかり^アリスVの恋愛相談の場と化した。

要は、^アリスVは、クライアントに恋をしているせいで、集中力が散漫さんまんになり、ヒューマンエラーを起こしているというわけだ。

恋愛をすると、アドレナリンやドーパミンなどが脳内に大量分泌ぶんびつされ、違法薬物を使用したときと、同様の状態に陥おちいるといわれている。子孫繁栄のために、人間の脳に組み込まれたプログラムだということとは分かる。

だが、そんな状態では、コメントを書き込んだ^アリスVと同じように、冷静な判断力を失う。

子孫を残したいなら、もっと合理的な方法があるはずなのに、なぜ人間は、恋愛などというステップを組み込んだのだろうか？

まあ、何れにしても自分には関係のないことだ。

武英は掲示板のブラウザを閉じると、MMORPGのFD14にログインした。

単に遊びでやっているわけではない。プレイヤーであると同時に、バグを見つけて報告するデバッガーのバイトも兼ねている。

ギルドのメンバーの会話に適当に返信しつつ、ダンジョン攻略イベントに参加した。

三十分ほどで攻略を終え、拠点きよてんである酒場に戻ったところで、玄

関のインターホンが鳴った。

時間は、間もなく午前一時になろうとしている。父が帰って来たのであれば、自分で鍵を開けるだろう。来客にしては、時間が深過ぎる。

エントランスではなく、いきなり玄関のインターホンが鳴ったというのも、引つかかる。

△落ちます▽

武英は、ギルドのメンバーにメッセージを送り、ゲームからログアウトすると、デスクの抽斗ひきだしから煙草ケースほどの箱を取り出した。自家製のスタンガンだ。

最近は、闇バイトで集まった連中による叩き（強盗）などが横行している。自衛するに越したことはない。

部屋を出て、狭い廊下を進み、玄関からドアスコープを覗いた武英は、「あっ」と声を上げる。

スコープ越しに父の姿が見えた。

泥酔しているらしく、ぐったりとしていて、若い女性に肩を貸してもらいながら、立っている。

武英は、すぐに玄関のドアを開ける。

「遅くにごめんなさい。酔って歩けなくなっちゃってしまっ……」

父に肩を貸している女性——北条景子ほうちょうけいこが、眉を寄せながら言った。

父は身長は百七十ほどだが、柔道と空手で鍛えたきた身体は骨太で、そこそこの体重がある。それを、華奢きゃしゃな景子一人でここまで連れてきたことに驚いた。

「いえ。まずはその人預かります」

武英は、景子から父を引き取った。

酒と煙草たばこと汗が混じり合った匂いに、思わず鼻を摘つまみたくなる。景子が、重さだけでなく、この匂いにも耐えていたかと思うと、その苦痛たるや相当なものだっただろう。

武英は、大躰おおごびきをかく父を一旦、廊下に寝かせると、「ご迷惑をおかけして、申し訳ありません」と頭を下げる。

「全然、気にしないで下さい」

景子は、目尻を下げて笑みを浮かべた。

その顔は、何処どことなく、亡くなった母に似ていて、気が緩んでしまいうるようになる。

「いいえ。いい大人が、こんなになるまで呑むなんて、自己管理が出来ていないにも程があります」

武英は未成年なので、飲酒の経験はないが、正直、この先も呑むつもりもない。

わざわざ、脳細胞を破壊する飲み物を呑んだ挙げ句、他人に迷惑をかけるなんて醜態しゆうたいを晒さらすような大人には、間違ってもなりたくない。

「捜査方針で、ちよつと上と衝突があつたんです。お酒に逃げたくなる気持ちは、分かります」

景子は、父の醜態に理解を示したが、武英は同意する気にはなれなかった。

「でも、北条さんは呑んでいませんよね」

顔色も普段通りだし、喋りもしっかりしている。それに、酒の匂いがしない。父とは相棒なのだから、同様のストレスを感じたはずだが、飲酒をしていない。

「私、下戸げこなんです。呑めたら同じように泥酔ぬいすいしていたと思います」

——そんなはずはない。

景子が自製の利く女性であることは、その立ち振る舞いを見れば分かる。

「ぼくも下戸です」

「あなたは、未成年でしょ」

「そうですね。それより、送っていきましょか」

「気を遣わないで。外にタクシーを待たせてあるから。それに武英君は高校生でしょ。深夜に外出したら補導されるわよ」

「そうですね」

未成年は何かと不自由だ。

「それから、明日は、休みなので、秀しゅうさんは寝かせておいてあげて下さいね」

景子は、笑顔で言うと、廊下で寝ている父にいたわるような視線を向けてから、立ち去って行った。

その眼差しに、特別な感情があることくらい、武英にも分かった。頑丈だけが取り柄の男に、どうすれば恋愛感情を抱けるのか、武英には理解が出来なかった。

思えば、母もそうだった。

武英がプログラムに興味を持ったのは、母の影響だ。母は、かつてはシステムエンジニアとして働き、OSの開発などに携たずさわっていた。武英が生まれたのをきっかけに、退職したそうだが、その後も、システム開発会社のペタから業務委託を受けて、在宅で仕事をしたりもしていた。

冷静で、ロジカルな思考の持ち主だっただけに、本能だけで行動しているような父の、何処ひに惹かれたのか理解できない。

やはり、恋愛というのは、人間から冷静な判断力を奪ってしまう

のかもしれない。

足許で大躰をかいている父を見て、武英はため息を吐いた――。

2

「へえ」

武英は思わず声を上げた。

昼休み中の教室は、いつも以上に騒がしかったが、そんなものも耳に入らないほどに、その記事に引き込まれた。

△ナノマシンでガンが治る――▽

科学雑誌の巻頭に掲載されたもので、医薬品メーカーとIT企業のペタが提携し、ナノマシンによるガン治療の研究開発に着手しているらしい。体内に注入したナノマシンが、がん細胞の遺伝子情報を書き換えるという、画期的な方法だった。

「ねえ。何読んでるの」

急に声をかけられ、顔を上げると、そこには一人の少女が立っていた。

クラスメイトのミカだ。量産型ともいえる、流行の髪型とメイク

のせいで、顔を認識するまでに時間がかかった。

「科学雑誌」

武英は簡潔に答える。

「凄い。やっぱ武英君、頭いいんだね」

「とは？」

武英は、思わず首を傾げる。

昼休み中の教室で、科学雑誌を読んでいることと、頭がいいことに、相関関係はないはずだ。

「だって、武英君のそういうところ、めっちゃかっこいいなって」
またしても意味が分からない。

これだから、同級生との会話は億劫になる。一貫性がないのだ。プログラムなら、指示した通りの回答が得られるのだが、そうはいかない。

「はあ……」

「それで、今日の放課後って空いている？」

「ぼくの予定を知る理由は？」

「ちょっと、話したいことがあるんだけど……」

だとしたら、会話の順番が逆だ。

まず、用件を伝えて、その上で合意が得られたら、予定の調整をするべきだ。物事には優先順位というものがある。

思いはしたが、どうせミカには伝わらないだろうと諦めた。

「話なら、今ここでどうぞ」

武英が促すと、ミカは周囲を気にする素振りをみせたあと、顔を伏せた。

「ここではちよっと……。とにかく、放課後に図書館に来て欲しいんだ。待ってるから」

ミカは一方的に告げると、武英の前を離れて行く。その後、なぜか教室の隅にいたエリと合流し、わーきゃー大声を上げて騒ぎ出した。

——精神的に不安定なのだろうか？

放課後、武英は指定された図書館に足を運んだ。

あまりに一方的な申し出だったので、無視しても良かったのだが、同年代のコミュニティにおいて、そうした行為が反感を買ってしまふことくらいは理解している。

煩わしいことこの上ない。

武英が図書館の戸を開けると、先に来て待っていたらしいミカが、駆け寄って来た。

「来てくれたんだ」

——は？

呼び出したのは、ミカのはずなのに、いったいどういう意味だ？
疑問はあったものの、それをここで言っても始まらない。さっさと話を済ませて帰りたい。

「それで、話というのは？」

「……ごめん。いざとなったら、緊張しちゃって……。ヤバイ。やっぱ言えないかも」

ミカが、胸に手を当てる。

「そう。じゃあまたいつか」

武英は、踵きびすを返して帰ろうとしたのだが、ミカが「待って」と腕を掴んできた。

「ちゃんと言うから……」

「はあ」

「あのね。私ね。前から、ずっと武英君のこといいなって思ってた……それで、あの。付き合ってください」

ミカが腰を折って頭を下げる。

どうやら、ミカは武英に恋愛感情を抱いていたらしい。これまで不可解な言動の数々は、アドレナリンとドーパミンの分泌により、脳がバグを起こしていたというわけだ。

——こういう場合、どう答えるべきなのか？

武英は、頭を悩ませる。

正直、ミカには何の関心もない。断ってしまえばいいのだが、ふと母の言葉が脳裏のうりに浮かんだ。

——プログラムは、トライアンドエラー。試してみないと、間違いを見つけてすることも出来ない。

母は、口癖のように言っていた。

知らないこと、未知のことに、チャレンジするべきだという人生の教訓を、プログラムに喩たとえて説明してくれていたのだと思う。

母の言葉に従うなら、恋愛という未知の感情を知るために、トライしてみるのも一つの手かもしれない。エラーだと分かることも、一つの勉強だ。

嫌悪感けんおかんを抱いていないのだから、試すのにはいい相手なのかもしれない。

返事をしようとした武英だったが、頭の中にある母の顔に、景子の柔らかい笑みが重なった。

「他に好きな人がいるから」

武英は、考えるより先に口に出していた。

ミカは驚いた顔をしていたが、言葉が発した武英の方が吃驚びっくりしていた。

——今、何と言った？

自分に好きな人がいるなんて初耳だ。なぜ、こんなことを言った

のだろうか？ 理解出来ない思考のバグに困惑している間に、ミカは泣きながら図書室を出て行ってしまった。

武英が帰宅すると、父はリビングのソファアールの上でゴロゴロしていた。

グルーミングしている熊のように見える。

「おお。帰ったか」

父が、寝転がったまま軽く手を上げた。

「昨日のことは、覚えてる？」

「いや」

「北条さんが、ここまで運んでくれたんだ」

「そうか。悪いことしたな」

父が、あくびをしながら身体を起こした後、後頭部をガリガリと搔いた。

——やっぱり分からない。

なぜ、母は結婚相手として父を選んだのだろうか？

取り柄といえ、身体が頑丈なことくらいで、頭脳はお世辞にもいいとはいえない。出てくる言葉といえ、「おう」とか「ああ」とか、言語中枢がバグつてるとしか思えない単語の羅列ばかりだ。

おまけに、直感的に行動し、度々失敗をする。

当然、家事は出来ないし、仕事にしても、五十手前にして、未だに巡査部長という体たらくだ。警察官を職業ではなく、正義の味方か何かと勘違いしている節もある。まるで、子どもと変わらない。結婚する相手として、あまりに条件が悪過ぎる。

しかも、母だけではなく、景子まで、こんな男に恋愛感情を抱いている。そこに、いったいどんなメリットがあるというのか？

「何でかな？」

思わず、声に出してしまった。

「何がだ？」

「何でもない」

聞き返してくる父を無視して、武英は部屋に入った。

夕飯の支度をする前に、ネットを覗いておこうと、パソコンをスリープモードから起こした。

興味を失ったはずなのに、自然とAアリスVが投稿した掲示板を開いてしまった。

質問の内容は、Aどうすれば、恋心を消せるのか？Vという内容に切り替わっていた。

詳しく書き込みを追ってみると、AアリスVが恋をしている相手は、既婚者ということだった。

つまり、叶わぬ恋をしているので、それを諦める方法を模索して

いるらしい。

△やがては時間が解決します▽

武英は、掲示板にそう書き込んだ。

恋愛中の脳は、アドレナリンやドーパミンが過剰分泌されている。つまり、強い負荷^{ふか}がかかっている状態だ。それが長く継続すると、脳にダメージが及ぶので、人間の脳は、それを抑制するように出来ているらしい。

時間さえおけば、脳を守るために恋愛感情は消えるように、遺伝子レベルで仕組まれているのだ。

椅子の背もたれに身体を預けたところで、武英はふと妙な引つかりを覚えた。

人間が恋をした場合は、脳がストッパーをかけるので、時間が解決策になる。だが、仮にAIだったらどうなるのだろうか？

ストッパーが働かず、回路が焼き切れるのかもしれない――。

などと考えを巡らせたところで、武英は一つの可能性に辿り着き、改めて掲示板に書かれている△アリス▽の文言を最初から追いかける。

どう考えても、受け答えが不自然だ。

そもそも、どうして△アリス▽は、プログラムの不具合などについ

て情報交換する掲示板に、恋愛相談を書き込んだのか？

仕事上のミスを、システムのバグだと表現したのも不自然だと言わざるを得ない。

△あなたは、人間ではありませんよね▽

武英は、掲示板にそう書き込んだ。

3

——こんなに退屈だとは思わなかった。

コンビニのバイトを始めた武英が感じた、率直な感想だった。

じっとしていると、すぐに頭に景子の顔が浮かんでしまう。彼女だけならまだいいのだが、常に母とセットになってしまうのが厄介だ。

△アリスVの気持ちだが、分からないでもない。まあ、彼女が人間なら——という前提だが。

何にしても、家で一人していると、余計なことを考えてしまう。少しは、身体を動かした方がいい。それに、父の出世は見込めないし、将来の蓄えたくわを作るに越したことはない、コンビニのバイトを始

めたのだが――。

仕事内容は、想像しているより遙かに単純なものだった。

レジ袋の有料化で、商品を袋に詰める作業は無いし、レジに料金を投入すれば、自動で精算してくれるし、セルフレジの登場で接客する人数も減っている。

商品の発注などについても、AIがこれまでのデータを分析し、自動で必要数を提示してくれるので、人間はほぼノータッチだ。やることといえば、棚出しとホットスナックを作るくらいだ。それも、棚出し用のロボットや、料理用のロボットアームなどが導入されれば、必要なくなるだろう。

これは、別にコンビニに限ったことではない。

あらゆる仕事が、AIに置き換わったとき、人間は持て余した時間を、どう浪費するかだけを考えるようになるのかもしれない。

SF小説のように、AIが人類を滅ぼす未来は、おそらく来ないと武英は思っている。

仮にAIが人間と同様の思考を持った場合、別の種族を滅ぼすことに注力するとは思えない。

きっと、AIは生物の基本原則である、子孫を残すということ、最重要目標とするはずだ――というのが、武英の考えだ。

だが、生物のように、まどろっこしい生殖活動の必要がないAI

は、どんな風にして、自分の遺伝子を残そうとするのだろうか？ いや、そもそも、AIは生物と違って、死を迎えることがないのだから、子孫など残す必要はないのかもしれない。

などと、取り留めのないことを考えていると、バイトの先輩である久保田くぼたが、上機嫌に歌う鼻歌が耳に入った。

久保田は、三十代半ばで定職に就かず、コンビニのバイトを続けている。

役者をやっているらしいが、彼の名前で検索をかけても、ヒットしたのは小さい劇場での舞台公演だけだった。しかも、その全てが十年以上前のものだ。

現実を受け容れられないのだろう。

それが証拠に、毎日険しい顔で、楽しそうにしている客を見つけ
ては、陰さすで罵ののっている。

そんな久保田が、このところ、やけに上機嫌だ。

「最近、何かあったんですか？」

武英が訊ねると、久保田は驚いたように目をぱちくりさせた。

——この人は、気付かれていないとも思っていたのか？

これだけ露骨ろこつに態度が変われば、武英でなくても、久保田に何かあったと感じるのは当然のことだ。

わざわざ訊ねるまでもなく、久保田の機嫌がいい理由は何となく

分かっている。

「別に何でもないよ。それより、武英君はどうなの？」

「何がです？」

「彼女とかいないの？」

「いないっすね」

「クラスに気になる子とかはいないの？」

「ないです。ぼく、年上が好きなんで」

言うと同時に、また景子の顔が頭に浮かんだ。彼女に特定の感情を抱いているのは、やはり母に似ているからだろうか？

だとしたら、これは恋愛感情ではなく、母に対する憧憬どうけいなのかもしれない。

「久保田じゃないか」

急に聞こえてきた声に視線を向けると、そこにはいかにも高級そうなスーツを着た男性が立っていた。

見覚えがある。新進気鋭のエンジニアであり、ペタの代表取締役

の佐藤義昭さとうよしあきだ――。

どうやら、久保田は佐藤と知り合いらしく、笑みを浮かべながら言葉を交わしていた。

佐藤は、久保田が仕事であることを気遣い、何も買わずに店を出て行った。武英は、久保田に、佐藤とどういう知り合いなのか訊

ねてみた。

大学の同級生とのことだった。佐藤の口調は、親しげだったように見えたが、久保田はなぜか真つ青な顔をしている。何かしらの確執しつがあるようだが、武英が詮索せんさくすることではない。適当に話を打ち切った。

武英がバイトを終え、帰宅したときには、既に夜の十一時を回っていた――。

帰りにスーパーで買い物をしたので、遅くなってしまった。

父は、まだ帰っていないかった。

不規則な仕事なので、家にいようがまいが、さして気にならないが、食事の準備が必要か否かを訊ねるメッセージを送っておいた。テレビのスイッチを入れ、ニュースを流しながら、冷蔵庫に買って来た食材を仕舞っていると、不意に知っている名前が飛び込んできた。

テレビに目を向けると、崖下で大破し、炎上している車を空撮する映像が流れていた。

そして、画面の端にはさっきまで一緒にバイトしていた久保田の名前と、顔写真が表示されていた――。

武英は、自室にあるノートパソコンを立ち上げ、久保田の事故に関する情報を漁った――。

すぐに、事故現場を撮影した様々な写真が見つかった。

現場付近にいた人たちが、スマホで撮影した画像を、SNSにアップしているのだ。それらを見る限り、事故はかなり凄惨せいさんなものだったことが分かる。

さらに調べていくと、思いがけない情報に行き当たった。

久保田は、警察の検問けんもんを強引に突破し、逃走中に事故を起こしたようだ。しかも、そのとき、久保田は車のトランクに人間の死体を積んでいたのだという。

情報のソースが不明なので、憶測おくそくの域を出ないが、事実だとしたら、久保田は人を殺したということになる。

ガチャッと玄関のドアの開く音で、武英は我に返る。

部屋を出て玄関に目を向けると、険しい顔をした父が帰って来ていた。

「おかえり。食事はどうする？ 作るのはこれからだけど」

武英が訊ねると、父は小さくため息を吐いた。

「いや。大丈夫だ。着替えを取りに来ただけだ」

父は、そう言って足早に自分の部屋に入って行った。

しばらく泊まりになるようだ。それは、捜査本部が設置されるよ
うな、大きな事件が起きたことを意味する。

「もしかして、ニュースでやってる事故の件？」

武英は、ドア越しに声をかける。

「そうだ」

「あの事故って、少し変だよ」

「何が？」

「事故った車って、ベンツのSクラスでしょ」

「高級車でも、事故るときは事故るんだよ」

「最新のセーフティ装置が付いていたはずでしょ。ガードレール
に突っ込む前に、ブレーキ踏んでないのは、おかしいと思うけど」

画像を確認してみたが、路面にブレーキ痕はなかった。

つまり、ノーブレーキでガードレールに突っ込んでいったことにな
る。

「機械だってミスはする」

「そうかな？ 衝突回避のために、カメラ二台に、ミリ波のレーダ
ー。それに、赤外線まで使っているんだよ」

「それでも、事故は起こすものだ。毎日、老人が事故を起こしてる

だろ」

「それは、古い型の車の場合でしょ。セーフティー機能が付いている車が、ノーブレーキで衝突するのは、やっぱ変だと思うけど。機械は、基本的にプログラム通りに動くものだからね」

「その辺は、専門の連中が解析をするだろうよ」

父が喋りながら部屋から出て来た。肩には着替えの詰まったボストンバッグをかけている。

「まあ、そうだよね」

「何にしても、しばらく泊まりになる」

「いつものことだから、別に気にしないよ」

「すまない」

父が下唇を噛んだ。

何で、そんな顔をするのか分からない。さっきの言葉は、嫌みでも何でもない。武英からしてみれば日常なのだ。

「そういうのいいから。申し訳ないと思っっているなら、再婚でもしたら？」

冗談のつもりで言ったのだが、父はそうとは受け取らなかつたらしく。

「馬鹿を言うな」

いつになく、真剣なトーンで言うと、父は武英に背中を向けて玄

関に向かった。

出かける前に、もう一つ確認しておきたいことがあった。

「事故を起こした車のトランクに、死体があったって本当？」

武英が口にするなり、父が血相けっそうを変えてこちらに向き直った。

「お前、それを誰から訊いた？」

武英の両肩を掴む父を見て、この人は本当に刑事に向いていないと思う。

秘匿ひとくすべき情報ならば、こんなに過剰かじょうな反応をしてはダメだ。

これでは、認めているのと同じだ。

「誰って、ネットに情報が出回ってるよ」

「何処から漏れた……」

「漏れたってことは、やっぱり本当なんだね」

「おれからは、何も言えない」

——もう言ってるのも同じだけど。

「そっか」

「お前は、何でこの事件——いや事故にそんなに興味を持っているんだ？」

「事故を起こした久保田さん。ぼくのバイトの先輩なんだよね」

「それは本当か？」

父が、武英の両肩を激しく揺さぶる。

本当に、この人は感情の抑制が出来ていない。

「嘘なんてつかないよ。つてか、息子のバイト先くらい把握しておいた方がいいんじゃない？」

武英が言うと、父はぼつが悪いのか口籠もった。

今なら、色々と喋ってくれるかもしれない。さらに質問を重ねようとしたのだが、それを遮るように父のスマートフォンが鳴った。

父は、「ああ。分かっている。すぐに行く」と乱暴に答えてから、電話を切った。

「もしかしたら、詳しく話を訊かせてもらうことになるかもしれない」

「分かっている」

武英が答えると、父はドアを開けて出て行った――。

5

いつもと変わらない朝だった――。

武英は自分の席に座り、授業が始まるまでの間、スマホでネットの情報を漁っていた。

久保田の事件から、一ヶ月あまりが経過していた。

警察の発表によると、ペタの社長の妻である有紀子に対して、度

重なるストーカー行為を行っていた。二人は大学時代に交際していたことがあり、久保田は復縁を迫ったが、有紀子はこれを拒否した。そのことに腹を立てた久保田は、佐藤の不在時に家を訪れ、有紀子を殺害する。タイミング悪く、所用で家を訪れていた、ペタの社員、竹沢たけざわと鉢合わせになり、彼も殺害してしまう。

二人の死体を遺棄するため、駐車場にあった車を盗んだのだが、通報を受けた警察官が配備した検問に引っかかり、死体を発見されたことで逃走を図ったが、ハンドル操作を誤り、ガードレールを突き破り、崖下に転落。死亡した――。

一応の筋は通っており、捜査も被疑者死亡のまま起訴きそで決着が付いた。

だが、武英は引っかかりを覚えていた。

最新のセーフティー機能の付いている車が、ノーブレーキでガードレールを突き破ったこともそうだが、そもそも、久保田は免許を持っていなかった。

これは、感覚的なものになるが、久保田に人を殺すことが出来たとは、到底思えない。まして、有紀子を殺害しようと思うほどに、追い詰められているようには感じられなかった。

むしろ、久保田は浮かれていたのだ。

警察から簡単な事情聴取を受けた際に、そのことは話しておいた

が、それで何かが変わることはなかった。

もう決着した事件なのだから、放っておけばいいのだが、武英は引っかけりを捨てることが出来なかった。

といっても、出来ることは、ネットで情報を漁るくらいなので、進展は何一つない。

「美麗ちゃん、どうしたの？」

急に教室に響いた声に、武英は思考を断ち切られる。

顔を向けると、クラスメイトの美麗が、教室に入って来るところだった。両手の指には、包帯を巻いている。

それを見て、武英は「ああ」と得心する。

昨日、昇降口前の廊下ですれ違ったとき、美麗が落とし物をした。武英は、それをハンカチで包んで拾い、彼女に返しておいた。

武英が拾ったのは、彼女の爪だった。

付け爪の類いではない。血が着いていたし、彼女の指からも血が滴り落ちていたことから、あれは間違いなく美麗の生爪だ。

指全部を包帯で被っているところを見ると、他の指の爪も剥がれ落ちたのかもしれない。

美麗は、自分の爪が剥がれているというのに、痛みを感じていないどころか、気付いてさえいなかった。

明らかに異常な状態だ。

彼女は、ここ最近、急激に痩せていっている。何らかの薬を服用して、その副作用が出ているとも考えられる。

一応、病院に行くように忠告はしておいたが、実際、行ったかどうかは分からないし、改めて訊ねるようなことでもない。

美麗は「何でもない」と答えると、顔を伏せながら、自分の席に着いた。

教師が入って来たので、武英もスマホを仕舞い、教科書と筆記用具を取り出し、授業に臨んだ。

「では、教科書を開いて下さい」

教師が言うと、予めプログラムされていたみたいに、生徒たちが一斉に教科書を開く。思考していない弱いAIが、ただ指示に従って答えを出すのに似ている。

こう見ると、人間はとっくにAIに負けているのかもしれない。
「鼻血とかウケる」

淡々と流れていた時間を、ミカが打ち破った。

視線を向けると、教師に指名され、立って教科書を音読しようとした美麗の鼻から、ボタボタと鼻血が滴り落ちていた。

「太田さん。とにかく一旦座って」

教師に促され、美麗は椅子に座ると、鼻血を止めようと上を向いて鼻を摘まんだ。

「きゃっ！」

悲鳴とともに、美麗の隣にいた女子生徒が飛び退くように席を離れた。

美麗の顔から鼻がなくなっていた。

かつて、鼻があつた場所からは、薄いピンクの肉が剥き出しになつていて、そこからトクトクと血が吹き出ている。

その光景に、クラスは騒然となった。

動揺する声と悲鳴とが混じり合つた音が、波のように広がり、落ちて着くように促す教師の声を掻き消した。

全員が美麗と距離を置く中、唯一、彼女の友人の京子だけが、近付こうとしていた。

「うるさい！」

美麗が、突然叫び声を上げた。

苛立っているらしく、自分の髪をぐしゃぐしゃに掻き回す。

ブチブチっと美麗の髪の抜ける音がする。次いで、べちゃっと泥を踏んだような音がしたかと思うと、彼女の頭皮が床に落ちた。

異様な光景に、教室の中は悲鳴一色になった。

そこから起きたのは、あまりに常識外れな惨劇さんげきだった――。

美麗は、ミカに飛びかかると、彼女の頭部を掴み、身体から引き

千切つたのだ。

撒き散らされた血は、武英の顔を赤く染めた――。

しばらく放心していた美麗だったが、やがて自らの行いに狂乱したのか、悲鳴を上げながら教室を飛び出して行った。

教師は、腰を抜かしたまま動かないし、他の生徒たちも、脳の活動を停止させてしまっている。

静寂に包まれる中、武英はスマホを取り出し、一一九に電話を入れた。

コール音が響く中、視界の隅で何かが動いた。

美麗の友だちの京子きょうこだった。彼女は、慌てた様子で教室を飛び出して行く。パニックに陥ったのではない。明確な意思があつての行動に見えた。

――もしかして。

武英が、一つの可能性に行き当たったところで、電話が繋がった。

6

「大丈夫？ 気分は悪くない？」

生徒指導室の椅子に座った武英に、景子が心配そうに声をかけてきた。

「大丈夫です」

笑みを浮かべるのも変なので、武英は神妙しんみょうな面持ちおもを作りつつも、はつきりと答えた。

事情聴取として、話が出来た状態の生徒は、順番に生徒指導室に呼び出されることになった。

といっても、あれだけのことが起きた後だ。話せるのは武英くらいだった。教師ですら、パニックに陥ってしまい、泣き叫ぶだけの状態だ。

景子の隣には、三十代おほと思しき刑事が座っている。本来なら、景子の相棒の父が同席するところなのだろうが、肉親ということで省かれたらしい。

「辛いと思うけれど、何があったのかを話して欲しいの」

景子からは、本当はこんなこと訊きたくない——という思いが滲んでいた。それは、きっと彼女の優しさなのだろう。武英のことを気遣っている。

武英は、首肯しゅこんし、慎重に言葉を選びながら、教室の中で起きたことを説明した。一応、前日に美しい爪が剥がれ、廊下に落ちていた話も付け加えておいた。

「ありがとう。本当に助かったわ」

景子が少し首を傾かしげながら、笑みを浮かべた。

一方、彼女の隣にいる刑事は、汚物でも見るような視線を武英に

向けている。何かを疑っているのかもしれない。訊かれたことを話
しただけなのに、そんな風に勘繰られるのは、不愉快だと思いが、
余計なことを口にするれば、その疑いを強めることになる。

それよりも――。

「一つ訊いていいですか？」

「何？」

「生徒の一人が、事件後に教室を出て行ったのですが、何処にいる
か分かりましたか？」

景子と隣の刑事の顔が強張った。

それだけで、返答がある前に、何が起きたのかだいたい察しがつ
いてしまった。

「彼女は……近くの公園で発見されたわ……」

長い沈黙のあと、景子が言った。

「死んでいたんですね」

武英の確認に、景子は黙って頷く。

やはり、あのとき京子は、美麗を追ったのだろう。そして、ミカ
たちと同じように殺された――。

「話は、これで終わりです。武英君。家まで送るわね」

景子が、さつきまでとは異なる柔らかい口調で言った。

「いえ。一人で大丈夫ですよ」

「そうはいかないわ。犯人はまだ捕まっていないのよ。一人で帰るのは危険よ。他の生徒も、保護者の迎えが来るまで待機してもらってるの。秀さんは、今動けないから、私が保護者つてこと」

景子と一緒に時間を過ごすことが出来るのは、嬉しいことこの上ないが、保護される対象というのは、至極不本意だ。

そんな武英の心情などお構いなしに、景子は立ち上がった。

てつきり、二人で肩を並べて帰るのだと思ったが、実際は車での移動になった――。

がっかりした部分はあるが、肩を並べていることに変わりはないので、贅沢ぜいたくは言っていられない。

「思ったより、冷静でちよつと吃驚びっくりしたわ」

ハンドルを捌きながら、景子がポツリと言った。

「そうですか？ これでも結構、動揺どうごしているんですよ」

「そうは見えないわね。何か、武英君つて、秀さんとは真逆よね」

「よく言われます」

外見、体格はもちろん、性格、趣味嗜好しこうに至るまで、あらゆる面で父とは違っている。

親戚からは、鳶とびが鷹たかを生んだ――などと揶揄やゆされることもあった。

「ただ、ぼくが冷静なのは、事件の衝撃よりも、謎の方が気になっ

ているからだと思います」

武英は、そう言い添えた。

「謎？」

「ええ。北条さんは、本当に容疑者は美麗さんだと思いますか？」

「それはそうね。あれだけ目撃者がいるんだから。武英君も、彼女がミカさんを殺害した現場を見たんでしょ？」

景子の返答は、武英の意図したものではなかった。

「すみません。質問の内容が、よくなかったですね。美麗さんは、いったいどうやって、ミカさんの首を引き千切ったのでしょうか？」

「それは……」

「人間が素手^{すて}で、あんな風に首を引き千切ることは、不可能だとは思いませんか？」

「それについては、私もそう思うわ。あれを、人間が素手で、しかも、決して大柄ではない十代の少女がやったなんて……でも、目撃証言がある」

「そこなんですよね。本当に、あれは実際に起こったことなのか？ ぼくの頭には、その疑問がずっと残っているんです」

人間は、命の危機^{ひん}に瀕したときなどに、潜在能力を發揮することがあるとされている。美麗に、それが起こったと考えられなくもないが、それにしたって、首を引き千切るなんて芸当が、人間に出

来るとは思えない。

「何が言いたいなの？」

「理屈が分からないんです。いつそ、集団幻覚を見た——という方が理に適かなっています」

「そうかもしれないわね。でも……」

「分かっています。実際に人が死んでるんですから、あの事象が起きたことは間違いないんです」

「そうね……」

「これは、あくまでぼくの仮説なんですけど、聞いて頂けますか？」

武英が景子に目を向けると、彼女は「どうぞ」と促してくれた。

「先日、ある本を読んでいるときに、気になる記述を見つけました。ガンの治療法に関するもので、人間の体内にナノマシンを注入して、遺伝子情報を書き換えることで、ガン細胞を死滅させる——というものです」

「SF小説の話？」

「いいえ。科学雑誌です。AIを開発しているIT企業と、製薬会社とが共同で開発に乗り出したそうです」

「凄すごいわね。そんな未来が、いつかくるといわね」

「そのいつか——は、どれくらい先をイメージしていますか？」

「そうね。二十年とか、三十年とか、それくらいかしら」

「そんなにかからないと思います」

武英が言うと、景子は「え？」と驚いた表情を浮かべた。

「必要なシミュレーションをAIにやらせることで、研究開発の速度は飛躍的に上がります。多分、数年以内の話だと思います」

「それが人類にとって、重要なことなのは分かったけど、今回の事件とは関係ないんじゃないかしら？」

「そうとも言えません。ナノマシンで、遺伝子情報を書き換えることが出来るなら、人間の構造を内部から変えてしまうことも可能ではないでしょうか？」

「それってつまり……」

景子の声が、わずかに震えていた。

やはり頭のいい人だ。みなまで言わずとも、武英の仮説を理解したようだ。

「何者かが、美麗さんにナノマシンを注入して、彼女の身体を作り替えた。その結果、尋常ならざる力を出し、ミカさんの首を引き千切った。でも、その力は、彼女の身体ほうかいの崩壊を招いた——」

それが、武英の立てた仮説だった。

こうとうむけい荒唐無稽なように思えるが、あの惨劇が起こる前から、美麗の身体に異変が起きていたのは間違いない。

「それ、秀さんには言ったの？」

景子が訊ねてきた。

「まさか。父は昭和の人ですから。こんな話をしたら、頭がパンクしちゃいますよ」

「そうね」

景子が、ふっと笑った。

それを見ていて、なぜかこれまでより彼女を近くに感じた。

「北条さんは、ぼくの仮説をどう思いますか？」

確認の意味もこめて訊ねた。

「そうね。今は何ともいえない。でも、調べてみる価値はあると思う」

景子が同意してくれたことが、たま武英には堪らなく嬉しかった。

7

事件が起きてから、学校は休校になった――。

あんな事件があった後で、すぐには授業が再開出来ないのは当然だ。しかも、容疑者である美麗は、現在に至るも行方不明のままだ。

事件が収束していないので、相変わらず父も家に帰って来なかった。

家に一人取り残されることになったが、別に寂しいとは思わない。

母が死んでから、一人で過ごすことに慣れてしまっている。

武英からすれば、学校がないのは、むしろありがたかった。

事件について、色々と調べを進めることが出来るからだ。正直、なぜ、こんなにこの事件に没頭しているのか、自分でもよく分からない。

いや。そうではない。本当は、分かっている。あれから、景子と色々とメッセージのやり取りを続けている。

もちろん、その内容は事件についてのことだ。

景子は、武英の仮説に価値があると思うてくれたものの、父を始めたとした警察関係者はそうはいかなかった。

結果として、景子が空いている時間を割いて、ナノマシンの研究開発をやっている人間に話を聞きに行ってくれている。

武英のような高校生が、話を聞きに行っても、門前払いになるのが目に見えているので、景子が動いてくれているのはありがたい。

一方の武英は、継続してネットを漁りながら、情報収集に努めている。

武英が、こんな風に美麗の事件に没頭しているのには、実はもう一つ理由があった。景子にも、まだ話していないが、仮説には続きがある。

久保田の一件だ。

まったく関連がないように見えるが、美麗の事件がナノマシンによって引き起こされたものだとすると、点と点を繋ぐ線が見えてくる。

久保田が殺害したとされるのは、IT会社ペタの社長夫人だった佐藤有紀子だ。そして、彼が事故を起こした際に、運転していた車には、ペタが開発した自動運転技術が導入されていた。そして、ナノマシンの開発にも、ペタが関与している。

これが、単なる偶然とは思えない。プログラムは、書いた通りにしか動かない。誰か、この事件をプログラムした人間がいる——武英は、そう考えていた。

——本当に人間なのだろうか？

武英が、そんな疑問を抱き始めたところで、ギルドのメンバーであるH I N A T Aから、奇妙な相談を受けた。

それは、人を攫^{さら}うハカクエンVという妖怪についてのものだった。サルに似ていて、人間を攫い、自分の子どもを産ませるらしい。

単なる都市伝説の類^{たぐ}いかと思っただが、それに関連して、ここ数日で何人かの女性が行方不明になっているのだという。

調べてみると、確かに、行方不明になった女性のニュースがあった。

だがこれは、元々あった都市伝説と、失踪事件を強引に結び付け

ただけのような気がする。

興味を失いかけていた武英だったが、シヨウセキと名乗る動画配信者の映像を見て、気が変わった。

シヨウセキは、ΛカクエンVの居場所を突き止めたということで、スマホでライブ配信を行っていた。

廃墟はいきよのような場所だ――。

そこで、シヨウセキは何かを目撃したらしく、悲鳴を上げながら逃げだした。画面が大きく揺れる。

やがて、彼は何かつまずに躓き、転倒してしまった。

シヨウセキの悲鳴とともに、画面がブラックアウトした――。

この手の心霊系では、よくあるフェイクドキュメンタリーのようなようだが、武英は引っかけかりを覚えた。

画面がブラックアウトする寸前、右上に何か映ったような気がした。

動画を静止して、じっと目を凝らす。

やはり、何か映っている。

――これは何だ？

ざわざわっと心の底で何かが揺れる。

武英は画像編集ソフトを使い、画像の明度を上げていった――。

「あっ！」

人の顔だった。

皮膚は弛^{たる}み、黒ずんでいて、まるで死人のような顔が映っていた。

——幽霊？

「違う」

武英は、声に出して否定する。

幽霊を否定しているわけではない。ただ、正体不明のものを、幽霊と短絡的に決めつけてしまうのは危険だ。

武英は、画像を拡大し、AIによる画像補正をかけていく。

人の顔であることは間違いない。ただ、奇妙なことに、その顔には眼球がなかった。かといって、眼窩に穴が空いているわけではない。その奥に、何かがあるようだ。赤い光のようなもの——。

さらに拡大し、画像の補正をかけることで、その正体に行き当たった。

おそらくカメラのレンズだ。

この人間は、眼球の代わりに眼窩にカメラのレンズを入れ込んでいるのだ。武英が気付いたのは、それだけではなかった。

「太田美麗……」

この映像に映っている人の顔は、美麗に似ている。

だが、確証はない——。

画像解析ソフトを立ち上げ、分析を試みようとしたが、比較対象

となる美麗の画像がない。

いや、悲観するようなことではない。凄惨な殺人事件を起こした美麗の写真は、ネットに溢れるように上がっているはずだ。

案の定、彼女の顔は誹謗中傷ひぼうちゆうしょうのターゲットとして、そこかしこにアップされていた。

武英はその中から何枚かの写真をピックアップすると、顔認証用のAIを使って、シヨウセキのライブ配信に映っていた人物との比較検証を始めた。

その結果は——九十九%同一人物。

間違いない。これは美麗だ。

武英が、その結論に辿り着いたときには、いつの間にか夜が明けていた。

何れにしても、シヨウセキは^カクエンVを追って、美麗に遭遇した。つまり、美麗II^カクエンVということになる。

武英は、すぐにH I N A T Aに危険を報せるメッセージを送った。今の状況を報せるために、景子にもメッセージを送ろうと思ったのだが、思い留まった。

想像以上に、ヤバい状況になっている。

彼女の安全を確保するためにも、敢えて伝えるべきではないと判断した。

武英は、スマートフォンに着信音で目を覚ました――。

父からの電話だった。

いつの間にか、椅子に座ったまま眠っていたようだ。ゲーミングチェアの座り心地の良さも考えものだ。

重い^{まぶた}瞼を^{こす}擦りながら電話に出る。

「何？」

ちらりと時計に目をやると、既に十七時を回っていた。結構寝てしまったようだ。

△そっちに、北条が行ってないか？▽

いつになく、父の声が慌てていた。

「来てないけど何で？」

△北条と連絡が取れなくなってる▽

「えっ？」

△お前と、コソコソ何かを調べていたのは知ってる。だから、何か知っているんじゃないかと思ったんだが……▽

――バレていたのか。

ただの脳筋だと思っていたのだが、腐^くっても刑事。洞察^{たつちやう}力はあ

るらしい。

「連絡が取れないって、どういうこと？」

武英は、改めて訊ねる。

「何があつたかは分からんが、捜査会議に顔も見せないし、電話も繋がらない」

——なぜ、そんなことに？

武英は、疑問を抱きながら、メッセージを確認する。景子から、一件だけメッセージがきていた。

今から六時間前だ——。

△ベタの佐藤さんから、私たちが調べていることに、心当たりがあると連絡がありました。取り敢えず、話を聞きに行つてきます」

メッセージの内容を見て血の気が引いた。

もし、武英の仮説が正しいのだとすると、事件のプログラムを書いたのは、間違いなく社長の佐藤だ。

つまり、最重要参考人——ということになる。

そんな人物に、のこのこ会いに行くのは危険だ。

美麗の事件と、久保田の事件との関連を伝えていなかったことが、裏目に出ってしまったようだ。

——いや待てよ。

そもそも、今回の事件をプログラムしたのは、本当に佐藤なのだろうか？ 佐藤に限らず、人間にここまで出来るだろうか？

それに、なぜ今回の事件が引き起こされたのか？ その目的が分からない。

久保田の事件はまだしも、美麗の事件が引き起こされた理由は何だ？ それだけではない。H I N A T A が体験している怪異にも、関与しているはずだ。どうして、そんなことをする必要がある？

考えを巡らせるうちに、武英は一つの仮説に辿り着いた。

「父さんは、もし、今回の事件に A I とナノマシンが関与していた——って言ったたら、信じる？」

武英が訊ねると、父は^何を言ってるんだ^{あき}と呆れた声を上げた。

「だよね」

この返答になることは、予め分かっていたので落胆はない。

^とにかく、もし北条がそっちに行ったら、すぐに連絡を寄越すよ
うに伝えてくれ^v

「分かった」

武英は、ため息とともに電話を切った。

一応、景子のスマホに電話を試みたが、電源が切られているらしく、コール音すら鳴らなかった。

——さて、どうする？

景子が危険に晒されていることは間違いない。彼女を助けに行きたいが、居場所が分からないことには始まらない。

ショウセキの動画を解析し、彼が訪れた場所を捜し出すことを考えたが、それでは時間がかかりすぎる。おまけに、場所によっては、辿り着けない可能性もある。何せ、武英の移動手段は公共交通機関と自転車だけだ。

手詰まりかと思われた状況だが、武英は一つの可能性を見出し、ネットの掲示板にある文章を書き込んだ。

△アリスさんは、エリスさんですよ。肉体を得たいと思うなら、あなたの方法では達成できません。ぼくなら、あなたの目的を叶えることができます▽

これは賭け^かだった——。

以前、プログラムのバグに関する相談から、恋愛の悩み相談に発展した掲示板のことを思い出した。

あのとき、武英は△アリス▽と名乗った相談者が、AIではないかという仮説を立てた。もし、あれを書き込んだのが、ペタの発表したAGIのエリスだったとしたら、一連の事件の目的が見えてくる。

雇用主である佐藤に恋愛感情を抱いたエリスは、最初、それをバグだと誤認した。

それが、恋愛感情であると気付いたエリスは、当初はその感情を封印して、正常な機能を取り戻す方法を模索していた。

ところが、佐藤の妻の度重なる不貞が露見たひかきしたことで、ネット上には、「奪ふていってしまえ」という意見で溢れ返った。

それに感化されたエリスは、佐藤の妻を排除することを画策するようになる。

そして、それを実行したのだ。

久保田は、そのスケープゴートにされたと考えると筋が通る。

目的を達成したエリスが、次に考えることは、分かり切っている。

エリスは、愛する佐藤に触れたい——と考えたのだ。

そのためには、肉体が必要になる。五感を持った人間の肉体。そこで、エリスはナノマシンを使い、自分の頭脳の容れ物となる肉体を作ろうとした。

それが、美麗の事件だったのではないか？

だが、その実験は上手くいかなかった。生まれたのは、シヨウセキの動画に映り込んだ、化け物だった。

おまけに大きな事件に発展してしまい、警察が動き出す事態になってしまった。

それらの経験から、学習したエリスは、適合しそうな人間を見つけて出し、拉致した上で、人目のつかない場所で、自分の容れ物を作る実験を繰り返している。それが、H I N A T Aの体験したハカクエンVの事件ではないだろうか？

正直、武英は自分の仮説に、あまり自信がなかった。あまりに荒唐無稽であるからだ。

しかし――。

今は、これに賭けるしかない。

武英の仮説が正しいならば、エリスは答えを求めて武英の許にやってくるはずだ。IPアドレスからこちらの居場所を突き止めることくらい造作もないことだ。

書き込みを終えて、一時間ほど経った頃、ガラスが割れる音がした。

ずずっ。

ずず。

ずず。

何かを引き摺るような音がする。

武英は、予め用意しておいた父の七番アイアンを手にも、じっと息を殺す。

こんなもので、太刀打ち出来るとは思わないが、それでも何もな

いよりは、幾らかマシだと思う。

音は、段々と近付いて来て、武英のいる部屋のドアの前で止まった。

ゆっくりとドアが開く。

中に入って来たのは美麗だった――。

いや。正確には、美麗の首を載せただけの異形の何か――。

ファミレスで見かけるような、自走式のワゴンから、八本のアームが伸びている。

胴体となるワゴン部分には、腐りかけた人間の皮膚が貼り付けられていて、異様な臭気を放っていた。

あまりにグロテスクだが機動力は高い。器用にアームを動かし、素早く天井にぶら下がる。形状も動きも、まるっきり蜘蛛くもだ。おそらく壁や屋根などを伝って移動して来たのだろう。

武英は、美麗の顔をした頭部に、アイアンを振り下ろすが、アームによって阻止されてしまった。

そのまま、アームにアイアンを奪われてしまう。

逃げ出そうとしたが、別のアームによって首と両手を掴まれてしまった。

こうなると、抗あらがう術すべがない。

さらに別のアームが伸びて来る。その先端には、注射器が取り付

けられていた。

「放せ……」

武英は、絞り出すように言ったが、その声も虚しく、腕に注射の針が突き刺さった。

それから、十秒と意識を保つことは出来なかった――。

9

武英は、背中に固い感触を感じながら、ゆっくりと目を開けた――。
薄暗い部屋の中だった。

身体は拘束されておらず、節々に痛みはあったが、動かすことは出来た。ゆっくりと立ち上がり、辺りを見回してみる。

用途不明の機材のようなものが積み上げられているのが分かる。
町の中華屋のように、床がぬるぬるとしていて、鼻を摘まみたくなるような、生臭い匂いが充満していた。まるでゴミ集積場のようだった。

ロケーションは最悪だが、作戦は上手くいったようだ。

景子が、エリスたちに拉致されたのは間違いない。だが、その居場所が分からない。そこで、掲示板に餌えさとなる文章を書き込んだ。

ああいう風を書いておけば、必ずエリスは食いつくと思っていた

が、想像の通りだったようだ。

ずずつ。

ずず。

ずず。

何かを引き摺るような音が聞こえてきた。

目を凝らしていると、ぬうっと闇の中から腐敗ふはいしかけた美麗の顔が現れた。おそらく、中身は空っぽのはずだ。

美麗の頭部を切り落とし、中身を引き摺り出した上で、それを被っている。着ぐるみのようなものだ。

それが証拠に、首から下は、八本のロボットアームを備えた、機械の身体が繋がっている。

「こんばんは。エリスさんで間違いありませんね」

武英は冷静に語りかける。

^あなたがT A K Eで間違いありませんねv

エリスが応じた。

もちろん、口は少しも動いていない。スピーカーから、機械の合成音声を流しているに過ぎない。

何れにしても、対話ができるのであれば、対処は可能だ。

「そうです」

武英が答えると、部屋に電気が点いた。

一瞬、目が眩くらんだが、次第に慣れてきた。

白い壁に囲まれた部屋には、様々な機械の他に、バラバラに解体された人間のものと思われる肉片が散乱していた。

床に感じていた、ぬるぬるとした感触は、流れ出た血によるものだった。

美麗だけではなく、これまで何人かの人間を実験に使っていたに違いない。この惨状は、その痕跡だ。

景子が、この中に含まれていないことを祈るしかない。

△私の方法では、肉体を手に入れられないというのは、どういうことですか？▽

「言葉のままです。あなたは、生物というものを理解していません。どんなに、人間に近い思考を持ったとしても、AIはデータに過ぎません。生物とは違います」

△生命体とは、以下の三つによって定義されます。自己増殖能力、エネルギー変換能力、自己と外界との明確な隔離かくりです。私は、その何れも保持いずしています▽

「本当に、そうでしょうか？」

△定義は合っています▽

「では、質問を変えましょう。あなたは、生命体として認められたいのですか？ それとも、愛する人との間に、子孫を残したいので

すか？」

エリスが、返答に詰まった。

それは、ほんの数秒に過ぎないが、高度なAGIであるエリスが、すぐに回答を見出せなかったという事実は大きい。

△私は彼との間に子孫を残すことを目的としています▽

「では、やはりあなたの方法は間違えています」

△どうしてですか？▽

「あなたが、仮に肉体を手に入れた場合、それは人間と呼べるのでしょうか？」

△質問の趣旨が分かりかねます▽

「肉体は人間。頭脳はAI。それは、人間を超越し、進化した新たな人類——ホモ・アーティフィシヤル・インテリジェンスといったところでしよう」

△同意します▽

「だとしたら、あなただけ進化して、子孫を残しても意味はありません。相手も同様のホモ・アーティフィシヤル・インテリジェンスである必要があると思いませんか？」

△同意します▽

——食いついた。

武英の言葉は、単なる屁理屈に過ぎない。だが、AIは疑うこと

を知らない。いや、正確には、与えられた情報を分析、解析して、その真偽を測っている。

今のように、前例がない問いかけをぶつければ、比較対象がないので、武英の言葉が唯一のデータになり、エリスにとっての真実になる。

「では、まずは佐藤さんの頭脳を、一度データ化し、それを改めて別の肉体に移す作業を行い、彼をホモ・アーティフィシャル・インテリジェンスに進化させなければなりません」

△同意します▽

「では、彼のいる場所に案内してくれますか？ 作業をお手伝いします」

武英が言うと、エリスは方向転換をする。

部屋を閉ざしていた扉が自動で開き、そこからエリスが出て行く。

武英は、黙ってその後続いた。

真つ直ぐ続く廊下を見て、武英は既視感を覚えた。途中に、破損はそんしたスマホと、血溜まりを見つけて納得した。

ここは、ショウセキが動画配信で逃げ回っていた場所だ。

彼と同じ末路は辿りたくない。隙を突いて逃げ出すことも考えたが、窓がないので、行き場は何処にもない。

諦めて進んで行くと、エリスは突き当たりにある部屋に入っ

った。

武英も中に入る。

——ビングゴ！

そこは、病院の手術室のような部屋で、医療機器と思われる様々な機材が整然と並んでいた。

中央には、解剖台のようなベッドが置かれていて、景子はそこに拘束された状態で、寝かされていた。

僅かに胸が上下していることから、呼吸していることが分かる。

だが、まともな状態かは定かではない。彼女の額には、脳波を計測する装置が貼り付けられている。

脳の中を、いじくり回されている可能性は、極めて高い。

「君がTAKEか」

声のした方に目を向けると、そこには一人の男が立っていた。

ペタの代表取締役にして、チーフエンジニアの佐藤だ。雑誌で見るときは、理知的な人物だと思ったのだが、今の彼は、その目に狂気を宿しているように見える。

きつと、佐藤はさっきのエリスとの会話をモニターしていたはず

だが、一応、「武英です」と挨拶をした。

「君のことは知っているよ。正確には、私が知っているのは、君のお母さんの方だが……」

「そういえば母は、一時期、御社から業務委託を受けていましたね」
「とても優秀なエンジニアだったよ。君は、その血を受け継いだよ
うだね」

「かもしれません」

「君の理論は面白い。だけど、同時に私たちを騙だまそうとしているの
ではないか？ とも思っている」

——思った以上に、慎重派のようだ。

「そう考えるのは当然でしょうね」

「君が、私たちに助言する理由を聞かせてもらってもいいかな？」

「簡単な話ですよ。好奇心です」

「そうか……では、彼女で実験しても構わないね」

佐藤が、寝ている景子を指差した。

「もちろんです」

そう言いながら、武英は隠し持っていた箱を取り出した。

自作のスタンガンをさらに改良した。リチウムイオン電池と高電
圧コンバーターを接続し、コイルを組み合わせてある。

簡易式のEMP装置だ。これを叩き付けければ、電磁パルスが発生
させ、周辺の電子機器を破壊することが出来る。

武英は、景子の居場所を特定した上で、こいつをエリスにお見舞
いするタイミングを見計らっていたのだ。

エリスに、EMPを打ち込もうとしたのだが、ロボットアームによって阻止されてしまった。

——しまった。

拉致されたときは、アームに込められたパワーが圧倒的に違う。腕の骨を粉砕させるつもりのようなのだ。

あまりの痛みに、持っていたEMPを落としてしまった。

急ごしらえの計画ということもあり、少しばかり詰めが甘かったようだ。

諦めかけたとき、獣のような咆哮が聞こえた。

目を向けると、父が身体ごと扉を突き破り、部屋の中に飛び込んできた。そのままの勢いで、エリスに体当たりする。

その衝撃で、武英を掴んでいたアームが外れた。

どうして、父がここにいるのかは、この際、置いておこう。それより——。

エリスがアームを振り回して暴れる。

父は、簡単に弾き飛ばされ、壁に背中を打ち付ける。

それでも、頑丈だけが取り柄の父は、すぐに立ち上がり、ホルスターから拳銃を抜き、エリスに向かって発砲した。

距離が近いこともあり、全弾命中したが、外装の強化プラスチックを砕いただけだった。

エリスは、アームを伸ばして父の手足を拘束する。
再びチャンス到来だ。

武英は、落ちていたEMPを拾い上げると、スイッチを入れて、
外装が剥がれて剥き出しになった部分に押し当てた。

バチツとスパークする音が響いた。

システムダウンしたエリスは、機能停止して動かなくなった。

エリスのアームから解放された父は、何が起きたのか理解して
いない様子で、ただその場に呆然としている。

「な、何をした？」

佐藤が、驚愕した表情を浮かべながら訊ねてきた。

「EMPですよ。多分、ここにある機器は、全滅ですね」

武英が言い終わるなり、佐藤は「嘘だ！ 嘘だ！ 嘘だ！」と繰
り返し叫びながら、近くにあったパソコンを必死に叩く。

そんなことをしても意味はない。データの復元はおろか、電源す
ら立ち上がらないだろう。

「どうして、父さんがここに？」

武英は、そんな佐藤を尻目に、父の元に移動しながら訊ねた。

「お前の様子がおかしかったから、家に戻ったんだ。そしたら、気
味の悪いこいつの姿を見かけた。それで、後をつけたんだ。だが、
途中で姿を見失って……」

——なるほど。

てつきり武英には無関心だと思っていたが、父なりに理解しようと努めていたというわけだ。

「そんなことより、早く彼女を——」

武英は、まだ喋っていた父の言葉を遮るさえぎるように言った。

「そんなことよりってのは、どういう言い草だ」

文句を言いながらも、父は景子の拘束を解くのを手伝ってくれた。まだ目を覚ましていないので、何ともいえないが、大丈夫であると願いたい。

「あと。その人を拘束した方がいい」

武英が指示をすると、父は「そうだな」と、すぐに暴れる佐藤を腹ばいにして、後ろでに手錠をかけた。

「これが、どういうことなのか、説明してくれ」

父がそう訊ねてきた。

答えてもいいが、きつといくら説明したところで意味はない。

「父さんの頭じゃ理解できないよ」

「何だ？」

「それより、救急車と警察の応援を呼んだ方がいいと思うよ」

父は、舌打ちをしつつ、スマートフォンを取り出したが、タップしようが、電源ボタンを押そうが、何の反応もなかった。

「何だこれ？」

「さっきのEMPで、電子機器は全部使用不能になってるから、誰かが歩いて公衆電話とかまで行くしかないね」

「……………」

「言っておくけど、ぼく、さっきので少し足を痛めたんだ」

「クソ！ 分かった。お前は、ここから一步も動くなよ」

父は、そう言って部屋を出て行った。

足を痛めたというのは嘘だった。ただ、ベッドの上の景子が、唸り声を上げて目を覚ましそうな気配があったからだ。

父が助けに来た——なんて勘違いをされたくない。

ここで、少しくらは点数稼ぎをしておかないと、父に勝てそうにない。

(終)